

## 平成23年度 学校評価 関係者評価票

学校名

兵庫県立千種高等学校

## 1 学校教育目標

連携型中高一貫教育校として定着し、発展する千種高校

## 2 重点目標

- ①地域に信頼され、愛される学校の創造  
 ②生徒の基礎・基本の定着と自主的に学ぶ姿勢の育成  
 ③生徒に夢と自信を与える教師集団の積極的な取組

## 4 自己評価の実施方法についての学校関係者評価

生徒、保護者のアンケート結果を踏まえた上で、自己評価していること、連携型中学の生徒にもアンケートを実施していることは評価できる。他校の状況を理解した上で評価実施すべきではないか。

## 5 総合的な学校関係者評価

保護者や教員が高く評価しても、生徒は低い評価している場合もある。そのギャップの原因を突き止めて欲しい。教育内容を総合的に数値で評価するのは難しい。1つ1つ数値に現れてこない部分でいろいろな課題があるはず。それらの改善に取り組んで欲しい。連携型中高一貫教育校になり千種中学校出身者が大半を占め、彼らが今の落ち着いた雰囲気を作っている。それを崩さないよう努力するとともに、広い社会の存在を知らせ、都心部へ出て通用する態度の育成をする実践目標ならびに実践項目を来年度以降設定すべきである。

## 3 自己評価結果(5段階評価:「5」がよくできているとなり、「1」はできていない)

	実践目標	実践項目	自己評価	課題および今後の改善策等	自己評価、改善策の適切さに関する学校関係者評価
1	地域に理解された「連携型中高一貫教育校」の定着、発展を図る。	ホームページの充実・改善を図り、学校の様子を随時発信する。	4.6	内容でさらにレベルの高いもの目指し、広範囲に閲覧を促す努力をする。アクセス件数も明確にし、学年ページを設けるなどして件数を増やす努力をする。	自己評価は高すぎる。もっと他校の状況を知った上で評価実施すべきである。HPはリニューアルして改善の努力は評価できるが今後はフェイスブック等も活用すべき。連携型のメリットを広くPRする工夫が不十分である。連携授業を出前授業に終わらせず、町内外に本校の取組の良さをアピールするために、新聞等報道機関に報道資料を定期的を送稿すべき。
2		学校行事、授業参観等を実施し、開かれた学校づくりに努め、その感想や意見を学校経営に役立てる。	4.1	しーたん放送を利用して千種町のみならず市内全域に参加の呼びかけを行う。行事や授業公開に限らず、本校が地域交流の場となる工夫をする。	
3		地域の行事には積極的に参加し、地域に貢献する。	4.8	部活動の取組がおろそかにならないよう考慮に入れながら、地域行事への協力は積極的に行う。	
4		連携授業、連携行事を推進し、千種中学校生徒に本校の存在を身近に感じさせる。	4.1	高校から中学校への一方的な働きかけにならず、中高の「双方向的な連携」を目指す。	
5	生徒の自ら学び、自ら考える主体的な姿勢を育成する。	学校の内外を問わず、積極的に挨拶を心がけるよう指導する。	4.6	挨拶がしっかりできる生徒を継続して育て、本校の「校風」になるよう徹底する。	評価が高すぎる。他校の状況を理解して評価すべきだ。地域の中で学ぶのも結構だが、自主的に成長していく工夫を生かすことがより大切だ。「挨拶を本校の校風に」とあるが、中学生は学校外での高校生の態度をよく評価していないことがアンケートから分かる。挨拶が千種町内の学校園全体の風習となるよう高校がもっと率先して推進すべきである。8の部活の外部コーチ導入についてはOBに働きかけるべきであり、効果的かつ現実的である。
6		インプロ学習やさまざまな場面で生徒が自主性を発揮できるよう指導する。	3.8	「インプロ学習」を本校の総合学習の柱と位置づけ、その学習成果が生徒の日常生活における主体的な考えや行動に波及することができるようサポートする体制を構築する。	
7		地域貢献活動、就業体験、ふれあい育児等の体験的活動を多く取り入れ、問題解決的な学習を展開する。	4.3	教員が手をさしのべる前に、生徒に任せ考えさせる機会を増やすとともに、事後に生徒同士が感想を発表し合う機会も設けるようにする。	
8		部活動、委員会活動への参加を積極的に推進し、充実した高校生活を支援する。	4.1	今後の教員数、生徒数を考慮し、部活動は数を見直すか、外部コーチの導入の可能性について検討する必要がある。	
9		LHRや面談等を通じて、主体的な進路選択能力の育成を図る。	3.8	生徒がどのような人生を歩みたいか、そのために必要となる知識・技能は何かを考えさせ、一人ひとりに寄り添い、具体的かつ詳細に指導していく努力を怠らない。	
10	生徒の興味・関心に応じた教育活動を展開し、「分かる授業」をするために、学習指導の工夫・改善に努める。	各教科において、授業研究など学習指導について工夫・改善がなされている。	3.4	教科の内容を充実させるために、授業のあり方について多面から考察していく。	自己評価はかなり率直なものと言える。より高い授業内容を目指すべきである。12については近隣在住者に限定せず、ボランティア精神に期待し広く呼びかければよい。
11		教科の枠を超えた授業の公開や研修会によって相互に研鑽する。	2.7	管理職も含め授業を参観し合う機会、初任者同士の校内研修の機会を増やす。	
12		地域の人材や素材を活用した特色ある授業の取り組みを行う。	3.9	固定化された人材に留まらず新たな分野を開拓し、その講師を捜し、新たな特色づくりに取り組む。	

	実践目標	実践項目	自己評価	課題・改善策等	自己評価、改善策の適切さに関する学校関係者評価
13	適切な学習指導と家庭学習の習慣化を図り、個々の生徒の進路実現を支援する。	生徒の実態や能力に応じて、個に応じたきめ細かい学習指導を実践する。	4.1	チャレンジコースの補習のみならず、アクティブコースの生徒の放課後の学習指導も学年主導で行えた。教員数が増えれば一層手厚い指導が行える。	やはり評価は高すぎるきらいがある。実践項目についてより具体的な内容を検討して評価すべき。OBにも意見を求めて参考にして評価すべき。進学校として期待されていないのは事実であるが、小規模校の特色を生かし、隠れた進学校として評価される実績を目指すべき。資格取得を目指す指導は生徒に自身を持たせるのに効果的である。進学、就職ともに「秘かな数値目標」を設定すべきである。14については家庭訪問などを通じて保護者への意識づけも必要である。
14		課題や宿題の指導を通して、家庭学習の習慣化を図る。	3.1	学年主導による週末課題の実施点検や生活行動記録表などを活用し、家庭学習の習慣化を図る。	
15		基礎学力の定着や資格取得のための補習を実施する。	4.0	卒業前の3学年全員に漢字検定を受検させるための事前指導した。今後も継続させたい。商業系資格合格者の合格率が高く、生徒の自信になっている。	
16		家庭連絡や家庭訪問を通して、保護者との情報交換や意思の疎通を図る。	4.0	夏季休業中の面談以外にも担任と保護者が面談する機会を増やす。携帯メールによる連絡システムを検討する。	
17		生徒の進路希望を達成するために、情報の収集や提供を行い、適切な進路指導を行う。	4.2	生徒一人ひとりの進路希望に応じた指導の成果が上がるよう、学年と教科の連携をさらに徹底する。	
18	互いを認め合う望ましい人間関係を築き、安心・安全な学校環境を構築する。	マナーや規律、規範意識を高める取り組みを、ホームルーム、生徒会活動等で行う。	3.9	校則違反、器物破損がほぼ皆無となった。生徒に自分自身や母校に対する誇りを持たせることで一層規範意識を高めたい。	これらの項目は他校にない千種高校の特色としてよくできていると思われ、評価は妥当といえる。問題行動がないことのみで満足せず、基礎学力を確実に身につけさせる努力を怠るべきでない。23に関連して、「なりすましメール」等の知識を生徒に知らせトラブルに巻き込まれないよう指導してほしい。相手の立場になり、考えて行動できる生徒の育成に今後も一層取り組んで欲しい。
19		生徒一人ひとりの役割や居場所を、クラスの中や様々な教育活動の場において設定する。	3.8	ホームルーム選出の委員に活動の場をこれまで以上に与えるなど、生徒の行動を信用し、生徒主体の運営をより心がける。	
20		生徒の個人面談や、日頃の声かけ指導を積極的に行う。	3.8	効果の薄い声かけとなっていないか、教員の思いが伝わる声かけとは、について教員間で意見交換する機会を設ける。	
21		防災教育や安全教育を、学校全体はもとよりホームルームで行う。	3.7	各学年が年度当初のホームルーム計画作成時に防災教育の計画を盛り込むようにする。	
22		人権に関わる課題を知識として学ぶだけでなく、日常生活において態度や行動に現れるような人権感覚の育成に努める。	3.7	「仲間のおかげで」「仲間の関わりを通して」気づいたり思えるようになることが人権感覚に他ならない。他者とのつながりを通じて生徒が新たな自己に気づくサポートを徹底する。	
23		教育活動全般に通じて、情報の活用に伴う情報モラルの育成に努める。	3.6	校内における携帯電話の使用のマナーも守られており、インターネットに伴う問題も発生していないことに安心せず、情報モラル教材は豊富に存在するので、今後も積極的にそれらを活用し生徒に情報モラルを意識させていく。	
24		キャンパスカウンセラーと連携を密に取り、悩みを抱える生徒の支援体制を作る。	4.3	生徒が相談しやすい環境づくりを心がけるとともに、カウンセリングと治療は別だという認識した上で、カウンセリングの研修会を増やす。	